乱し、乱され、恋の花

豊田佳凜

「君がもう少し大人になって、その意味に気づいた頃に迎えに行くよ」

【ここまでのあらすじ】

『普通の』女子高校生の河本紗弥には悩みが二つあった。一つは才色兼備な姉の存在、もう一つは「君を迎えに行く」と誰かに言われ、簪を手渡される夢を頻繁に見ることだった。学校が夏休みを迎えた頃、帰省してきた姉と祭りに出かけた先で、紗弥は不思議な青年と出会う。クロと名乗ったその青年は自らが「天狗」であり、紗弥を花嫁として迎え入れると言い出し、天狗たちの住まう世界へ彼女を連れ去る。クロの幼なじみであるナズナという少年から、紗弥が毎年夏に行われる天狗の世界の祭りでクロと共に神楽を踊る「花嫁役」に選ばれたこと、元の世界に戻るためには祭りを成功させなくてはならないことを聞く。渋々ながらも花嫁役を引き受けた紗弥は、舞の指導をしてくれる天狗の美女、アゲハと出会う。クロが普通の天狗と違い人間とのハーフであり、それが原因で家族仲が良くないことを聞く。その直後、空から雷が落ちたことで話が中断する。

＊＊＊

「はぁ。空から突然雷が落ちたかと思ったら、このウリ坊が居たと」

玄関先でガシガシと頭を掻きながら私たちの話を聞いたナズナは、訝しげ気にクロに抱かれたウリ坊を睨んでいた。必死にコクコクと頷く私に反し、クロは笑顔でしきりにウリ坊の頭を撫でて

いる。ウリ坊は撫でられるのが気持ち良いようで、嬉しそうに鳴き声を上げていた。そんなクロと私の態度が気に入らないのか、ナズナの額に皺が三本刻まれる。心なしか握られた拳が怖い。

「クロ。お前、なかなか良い度胸だな」

あ、これはまずいやつだ……。

私が頬をひきつらせたのとほぼ同じタイミングでナズナは深くため息を吐くと、ニコニコしているクロの耳たぶを思い切り引っ張り、声を張り上げた、

「出かけるなら知らせろっていつも言ってるだろ！　このすっとこどっこい!!」

……やっぱり、怒られた。

「だって、台所で鼻歌歌ってる時に声かけるとナズナ怒るじゃん。だからそっとしておいてあげようって気ぃ遣ってあげたのに。うう、耳いたーい……」

「うるせ。それとこれとは話が別なんだよ。紗弥もこんな適当な奴にほいほい付いてくんじゃねぇ」

「ご、ごめんなさい……」

玄関先でたっぷり絞られた後、所を居間に移し、私とナズナは連れ帰ったウリ坊の手当てをしていた。ウリ坊のケガは鋭い刃物で切られたような傷があったけど、幸い深くはなく、何日かすれば治るそうだ。手当てしている最中も大人しく私の膝の上に収まっていたウリ坊は、お礼でも言うようにブーブーと鼻を鳴らした。

「にしても、あの雷なんだったんだろう……」

毛の流れに沿ってウリ坊の縦縞を撫でてやれば、ウリ坊は気持ち良さげにクリクリした瞳を細めた。縁側でボンヤリ空を眺めていたクロが私の言葉に同調するように「そうだねぇ」と顔を向ける。一方、ナズナはちゃぶ台に広げていた消毒液と包帯を治療箱に戻すと、話題のウリ坊の鼻をつんとつついた。

「お前たちの言う通り、雷はコイツだったんじゃねぇの。俄かには信じ難いけど、昔から猪は山神の使いだって聞いたことあるし。山神に会いに行ってコイツが出て来たってことは、とりあえず様子見って判断されたんじゃないか」

「そう、なのかな？」

「そうじゃねぇの。だって、アンタやクロに懐いてるのが証拠だろ。神は大抵、まして山神は自分に有利な存在を傷つけたりはしねぇんだし」

――あ、確かに。ナズナの解説は拝殿に向かう道すがら、クロに教えてもらっていた。なら害を加えることは無い……のかな。

「しばらくは家で面倒見るんだし、名前でも付けたらどうだ？」
「え、面倒見るの？」
「当たり前だろ。コイツが普通の猪じゃねぇってのはさっき言った通りだし。何より、ケガが治るまではここに置いてやった方がコイツにとっても良いことだろ」
「いや、でも……」
仮にも神様の使いをそんなペット扱いしちゃっていいんだろうか。
けれど、ウリ坊は私たちの会話の内容を理解しているのか、膝の上で主張するように「プギュ！」と短い尻尾をはち切れんばかりに振っている。……え、本当に私が名前付けなきゃいけないの？
（そんなこと急に言われても……）
キラキラと瞬く黒目に期待されてる気がして、必死に頭を回転させて山の上の神社を思い浮かべる。えっと、確かあの神社にも何かあったはずだ。……ええっと。
「あ、ツツジとかどう？」
パッと思い出したのは、山小屋まがいの社務所の傍に咲いていた夏咲きツツジの花だった。夏咲きツツジはその名の通り夏に咲くツツジで、おしべが長いのが特徴的な花だ。そのおしべの長い様子が何となくこの子の鼻先みたいだと思い、そっとウリ坊に提案してみる。ウリ坊は響きが気に入ったのか「プギィィィ！」とひと際高い声を上げると、その鼻をグリグリと私の腕に押し付けた。
「良かったな。気に入ったみたいだぜ」
「だね」
お気に召したくれたようで良かった。
たまらずホッと息を漏らしていると、不意にクロが空からウリ坊に視線を走らせ、次いで縁側から裸足で外へ降りた。ヒタッとネコが飛び降りたような空気の揺らぎに、治療箱を片していたナズナが慌てて目を見開く。
「おい！　お前どこに行くつもりだ！　勝手に行くなっ言ってんだろ！」
「……一応、もう一回神社の方を見てくるだけだよ。そのウリ坊以外にも何か居るかもしれないし。紗弥ちゃんのことよろしくね」
「あ、ちょ、待て！」
ナズナの制止も聞かずクロは一瞬私を振り返ると、そのまま空に飛び立ってしまった。うあぁぁぁ、とうなり声を上げ、ナズナはクロが飛んで行った方向を恨めしそうに睨んでいる。……どうやら、クロはいつもナズナに行先を告げず、好き勝手にうろつい

ているようだ。ナズナのイライラが手に取るようにわかってしまったので、思わず「本当にクロには困ってばかりだね、ツツジ」と、ウリ坊を撫でることに意識を集中させるものの。

「おい、紗弥」

「は、はいぃぃぃ」

ワントーン声が低くなったナズナにビクリと肩を震わせていると、ナズナはズンズンと距離を詰め、少しためらう素振りをした後私の髪に顔を寄せた。そのままスン、と匂いを嗅ぎ、次いで不機嫌そうに眉根が額による。

「あの、私臭いかな……？」

突然匂いを嗅ぐという行為より、至近距離で睨まれる方が心臓に悪い……。

心中を察したのか、ナズナは声が低いまま「ああ、悪い」と私から離れると、再び空に目をやってガシガシと髪を掻きむしった。

「アンタ、もしかしてアゲハ様に会ったのか？」

「え、アゲハさん？　会ったけど……それがどうかしたの？」

「やっぱりな。アンタから微かに百合の匂いがする」

ナズナに指摘され、鼻の奥に香しい優美な匂いが蘇る。……確かに彼女から百合の良い匂いがしたけど、それがどうしたんだろう。

私が余程変な顔をしていたのか、ナズナはガシガシしていた手を私の頭に乗せ、同じように乱暴に撫でた。「い、痛い痛い！」という私の訴えも届かず、髪がグチャグチャにされる。ひどい。短いからただでさえボサボサになりやすいのに。

「舞の練習がある以上難しいとは思うが、あんまりアゲハ様とは親しくするなよ」

「は⁉　何で？」

「クロはアゲハ様のことが苦手なんだよ。……アゲハ様だけじゃねぇ。アイツの兄さん関係の連中とは、仲がよろしくないんだ。気を付けろよ」

ナズナは私に忠告すると「昼飯にするから手伝え」と台所へ向かう。練習を見てもらうのに仲良くするな、なんてどう考えても無理難題だ。気まずい中黙々と練習に励めるほど私の神経は図太くない。

「はぁ……お腹空いたし、もう後で対処しよう……」

それに朝から踊ったり山を登ったりして疲れた。お腹の虫もぐるるる……と騒いで仕方ない。何より、一度にたくさんの情報を入れすぎで限界だ。

苦しさに慣れてきたお腹を押さえながら、これ以上考えることを放棄し、私はナズナが怒りだす前にと急いで足を動かした。

＊＊＊

遅めの昼ご飯を食べ、それに伴い遅い夜ご飯を食べた後も、クロは一向に姿を見せなかった。すっかりへそを曲げたナズナはぶつくさと文句を言っていたけど、言葉の端々から彼を心配する様が見て取れる。でも最後は眠気に負け、十一時になる直前ナズナは布団の中で崩れ落ちるように夢の世界へ旅立ってしまった。

一方私はというと、夏休みに入ったおかげで夜更かしに慣れていたので、忘れないうちに昼間習った舞の練習をすることにした。

昨日より少し痩せた月が見守る中、左手に扇子を持ち、アゲハさんを真似て動きを反復する。歩き方はまだ知らないから、とりあえずその場で足踏みをしながら。不本意だけど、元の世界に帰るためにはこれを踊れるようにならないとならない。

お姉ちゃんみたいにやらないと。じゃなきゃ、また「それなり」って言われちゃう。

「あ――」

指摘されたその言葉に一瞬気を取られた隙に、手から扇子が落ちてしまった。慌てて朱い桜に手を伸ばしながら、思わず唇を噛む。

私、なにやってるんだろう。流されるまま連れて来られて、ごちゃごちゃ色んなこと聞かされて、やらされて。本当に、なにやってるんだろう。

細い満月が煌々と地面に私の影を落としている。影は本物の私を呑み込むように真っ黒で、深い。……このまま、このままでいいのかな。私は。

伸ばしかけた手を戻そうと引っ込ませたその時、もう一つ影が出来た。

「舞の練習してたの？　偉いね。でも、ダメだよ。夜更かしはお肌に悪いって言うでしょ？」

聞こえてきた穏やかな音色はいっそ憎らしいほどだった。声の主は素早く朱い桜を拾い上げると、軽く砂をはたいて私の眼前へ差し出してくる。そっと目線を地面から上に移せば、夜の空に似た瞳が静かに私を見つめていた。

「……べ、つに。関係ないでしょ」

あまりにもさらっとした口調で言われたので、少し反応が遅れる。突然いなくなってやっと帰って来たと思ったらこれですか。ナズナが口を酸っぱくして怒るのもわかる気がする。

私の心中なんて一滴も知らないクロは、中途半端に浮いている私の右手に扇子を握らせると、満足げに瞳を細めた。背中に生えている彼の翼が月光を受け、キラキラと艶やかに煌めいている。

それが何だか気に食わなくて、左手でそっと翼に触れてみれば、クロが驚いたように肩を揺らした。

「ど、どうしたの？　紗弥ちゃん。なにか付いてる？」

「ううん。この翼って普段どうなってるのかなって思って。だって、背中に生えてるのに服破けてないから。なんか気になる」

「あ、ああ。そういうことね。……この翼はね、本当に生えてるわけじゃないんだ。天狗に備わっている空を飛ぶ力を『翼』という形で具現化したものなんだよ。だから服が破けたりしないんだ。もっとも感覚は手足みたいにあるから、傷つけられると痛いし、その、くすぐったいのもあるんだ」

「へー……」

なるほど、なんて気のない返事をするけど、翼を撫でる手は止めない。力を目に見えるようにしたって言うけど手触りは鳥の羽そのものだ。ふわふわしてて、つやつやしてて、ちょっと気持ち良い。

「聞きたいことがあるの。昼間、聞きそびれちゃったから」

「……何かな？」

「どうして、私が『花嫁』なの？」

そうだ。私はまだこの問いに対する答えをもらっていない。だって正直、自分が可愛いだとか美人だとか微塵も思ってないし、舞どころかフォークダンスさえ危ういものだ。そんな私がどうしてここに連れてこられたのかまったく見当がつかない。いくら過疎化が進んでいるとはいえ、翠花町には私より綺麗な子も踊れる子も居るはず。……なのに、わざわざひねくれ者を選ぶなんて。相当の理由でないと納得できない。

クロは私の手からスルリと逃れると笑顔を消した。青い瞳に映り込む私は笑えないほど口元がひきつった、ひどい顔をしている。額から零れた汗が気持ち悪くて、右手で乱暴にそれを拭った。

「お祭りで披露するのが番でなくてはならないからだよ。詳しくは俺もわからないけど、男女一対で踊るのが古くからの決まりでね。だから特別な年じゃなくても、男女の番がこれまで選ばれてきた。君が花嫁なのは、俺が山神様に選ばれて、君が俺に選ばれたからだ」

「だから！　どうして私があなたに選ばれなきゃいけないのよ！」

「それは、ええっと……俺がその簪を渡して、君が受け取ったから」

「……は？」

言葉と共にクロが指を指したのは、私の耳元で揺れる簪だった。髪が乱れるのも構わず抜き取ってみると、不思議なことに簪のト

ンボ玉がチカチカと点滅し、映り込む私の顔をボンヤリ反射していた。

いつの間にか私の元にあったこれが、クロが私に渡した物ってこと……？

「実はね、紗弥ちゃんが小さい頃に俺たちは出会ってるんだ。人間界での夏祭りの時にね」

黙り込んでしまった私の様子に気づいているのか、いないのか。クロは一歩近づくと私から簪を攫った。涼やかな音を立てたそれは、彼の手の中でますます激しく点滅し、キィィンと甲高く鳴り響く。そこにクロが形のいい唇を当てると、光は一筋の矢を描き、やがて私の中へすぅっと吸い込まれた。

「今のが俺と紗弥ちゃんが繋がってるって証拠だよ。この簪には僅かだけど俺の力が宿ってる。だから、俺はこれを目印に君を探してた。これのせいで君も何かしら影響を受けていたはずだよ。……心当たり、ない？」

「心当たりなんて、そんなの――」

いや、ある。一つだけ。簪と同じようにいつの間にか私の身近にあったもの。……最近よく見るようになった、あの夢だ。暗闇の中で泣いている私を導いてくれる優しい手。

「まさか、そんな」

否定しようとする私を咎めるように簪から青い光が溢れ、中へ入ってくる。その瞬間、一つの映像が脳裏に直接雪崩れ込んできた。

背丈が今の半分もいかない、小さい私が人の波に呑まれ泣きじゃくっている。

提灯の明かりに照らされてオレンジ色に揺れる私は、まるで陽炎のように淡く、消えてしまいそうだった。まだ髪を切る前の、毎日が楽しかった頃の私。

（あ、これってもしかして……）

思い出した。確か小学三年生の時のことだ。高校生になったお姉ちゃんに彼氏ができたのが気に食わなくて、彼と出かけるという彼女にこっそり付いて行き、私は迷子になった。

通い慣れた通学路のはずなのに周りは知らない大人ばかりで、夜なのに昼間みたいにひどく眩しくて、まるで知らない世界に迷い込んでしまったみたいだった。それが怖かった私は一人途方に暮れて泣いていて。昨夜のように押されて、手を擦りむいた私に声をかけてきたのがクロだった。

『そこのお嬢ちゃん、大丈夫かい？』

そんなセリフと共に。

「あの時はこんなことになるとは思わなかったから、びっくりしたよ。まさか君が俺の花嫁になるなんてね」

「『なるなんてね』って、私を花嫁にしたくて簪渡したんじゃないの？」

「いやいや。お嫁さんにしたいなぁって思って渡したのは本当だけど、現実になるとは夢にも見てなかったから。だって、今年に入るまで自分がお祭りで踊らなきゃいけないの知らなかったし。だから、父上から人間の花嫁を連れて来いって言われた時『やった！　紗弥ちゃん連れて来よ！』って思ってたよ」

な、なんだそれ……。脱力しそうになるのを踏ん張って堪えるけど、思いっきり項垂れたいところだった。ポンと渡された簪がきっかけで七年後にこんなことになるなんて、さすがに予想外すぎる。

「でも、君を見つけて驚いたよ。あんなに小さかった女の子がこんなに大人っぽくなるなんて。髪、切っちゃったんだね」

頭を抱えたい気分になっている私を慰めるつもりなのか、不意にクロの冷たい手がそっと私の前髪に触れた。額を隠すように切りそろえた前髪が冷やりと夜の風を受け、元の位置へ戻る。右手に持つ扇子が再び落ちそうになったので、慌てて握り込めば、そこに彼の手が重なった。

少しでも個性を出してみたくて、髪を短くした。髪は俯きがちだった私の視界にいつも入り込んで、私の世界を狭めていた。お姉ちゃんみたいなふわふわで、綺麗な長い髪が欲しかったけど、邪魔になったから切った。切った日から世界が変わると信じて切った。

実際遮っていたものが無くなったことで、見えなかったものが見えるようになった。俯いていた顔が光を求めて上へ向いた。上にはまだ知らない世界があって、それを見て私も何かになれると思っていた。……でも、やっぱり私は私のままだった。

「髪が短くなれば、お姉ちゃんの背中を追いかけている私じゃなくて、私も知らない『私』になれると思ってた。年を経ることに擦り切れていった、眩しくて、キラキラして、毎日が宝探しみたいな。そんな気持ちが戻ってくると思ってた。……けど、戻ってくるどころかますます遠くなっていった」

友達も、勉強も。必要以上に踏み込まず距離を保って、いつも相手が求める言葉を与えてた。ここまで予習していれば大丈夫だと言い聞かせて、涼しい顔を装いながら本当は不安でたまらなくて。

そうして出来上がったものは、私の望んでいた「私」じゃなかった。

「ねぇ紗弥ちゃん」

すっかり耳に馴染んでしまった歌うような声は、穏やかの中に鋭さが混じっていた。叱られた訳じゃないのに怖くなって、思わず逃げようと足を引くけど、掴まれた右手がそれを許さない。

「逃げないで。……俺は、君を否定したりしないよ」

そろっと顔を上げれば再三青の宝石とぶつかる。今までヘラヘラ笑っていたくせに、こんな時だけ真剣に私を射抜くなんて。やっぱりこの人はズルい。

繋いでいた掌は二人の温度が混ざり合ったせいか、今はもう温かった。

「紗弥ちゃん。俺も辛い時期があったよ。半分人間だからってだけで嫌な思いもした。けど、それだけじゃなかったよ。……紗弥ちゃんと初めて会った日ね、母さんの命日だったんだ。ちょうど現世に出られたから、ナズナに内緒で人間界をフラフラ散歩して、君を見つけた。あれから時は流れたけど……君は何も変わってない。君は俺に大切なものをくれたんだ」

「大切な物？　物をもらったのは私の方だよ」

ほら、と目線で簪を指すけどクロはゆるりと首を振って笑った。それは、これまで見てきた微笑みの中で一番儚く、掻き消えてしまいそうなほど弱々しかった。

「怪我をした紗弥ちゃんを手当てした後、俺たち二人でお姉さんを探して、彼女を見つけたよね。それからどうなったか覚えてる？」

「ええっと、お姉ちゃんに気を取られてる間にクロがいなくなっちゃって……。それにムカついたから、クロを捕まえるために追いかけた」

「そうそう。君が追いかけてくるなんて思ってもみなかったから、すごく驚いたんだよ。しかも、紗弥ちゃんすごい泣いてるし」

「だって今まで一緒だったのに急にいなくなるから……。お礼もまだ言ってなかったのに」

記憶が流れ込んできたのと同時に、当時の感情も蘇ってきたのか。怒りと心細さと寂しさで胸の奥はいっぱいいっぱいだった。

あの日――怪我をした私を手当てしたのは違う人（おそらく、人間ではなく天狗だった）だけど、クロは転んだ拍子に壊れた下駄を直してくれた。私を見つけて寄り添ってくれた。……嬉しかったの。たったそれだけのことが。

コッソリ見上げた彼の瞳は、屋台や寄り添う人たちを羨んでいて、寂しそうで。だから、私といる時ぐらいそんな顔をしないで欲しかった。

「なのに、勝手にいなくなるから」

ふつふつ湧き上がる怒りを込めてクロを睨みつけると、クロは誤魔化すように肩をすくめ、繋いでいた手を引っ張った。すっかり油断していた私は抗うすべもなく、とんと収まるように腕の中へ閉じ込められる。……昨夜はそこから逃げようとジタバタ暴れたけど、今は全くそんな気は起らなかった。

「あはは、ごめんって。……当時の俺ね、ナズナ以外の人たちみんな敵みたいに思ってたんだ。ほら、さっき嫌な思いしたって言ったでしょ？　そのせいですごく孤独感というか、誰も俺のことなんて見つけてくれないって思ってた。ましてや、探して追いかけてくるなんてあり得ない。……なのに、君だけは違った。君は俺を追いかけて、見つけてくれた」

だからね。そこで一旦言葉を区切ると、クロは恐る恐る私の背中に回す腕に力を込めた。ほんの少しだけ開いていた二人の距離が縮まってゼロになる。

「あの時、俺と出会ってくれてありがとう」

ギュッと抱きしめられた彼から香る、雨上がりの草の匂い。ズビッと吸い込んだ鼻と目から大量の水分が飛び出してくけど、きっとクロなら笑って許してくれるだろう。

（出会ってくれてありがとうとか、なにそれ）

それを言うのは私の方だ。背伸びばかりして、駄々をこねて、挙句ギャーギャー泣き喚いて。そんなのただ自分勝手に行動しただけなのに。

決してクロのためじゃない。私がクロと離れたくなかったから、寂しかったから。ただそれだけだ。自分の気持ちを押し付けて相手を自分の支配下に置きたいという自己中心的で、高慢で、身勝手な子供の我侭。それは「大人になるために捨てるもの」としてごみ箱に丸めて捨てたものなのに。……この人は、ありがとうなんて言って、笑うんだ。

（本当に変な人）

けどその変な人を怒る気になれない私も、もしかしたらおかしいのかもしれない。

「あ、あれ？　今笑った？　なんで？　まぁ紗弥ちゃんが笑ってくれたなら、何でもいいか～」

肩の震えで伝わったのか、不思議そうに首をかしげながらクロがポンポンと私の背中を叩く。それがひどく優しくて、くすぐったくて。仕返しを兼ねてギューッとしがみつけば、途端に声が焦ったものへ変わった。

「ええっと、と、とにかく！　これでひとまずは紗弥ちゃんの疑問は解決した？」

「まぁ、知りたいことは一通り聞けたかな」

「それじゃ、あとはお祭りに向けて舞の練習頑張ろうね～」

数多の星が瞬く夜空の下。私とクロは顔を合わせながら、金色の月へ向かってその拳を突き立てた。……正直、自分の置かれている状況は異常だし、クロのことはあんまりよくわからないけど。

今だけは、不可思議な気分に乗せられたままでいいのかもしれない。

少しだけ自分のことが好きになれたから。

《　続　》

（二〇一八年度卒業）